

## 老いの繰言 — 研究の今昔

大阪大学名誉教授 橋 覚 勝

○

わたくしが大学をでて、恩師松本亦太郎先生の懇意によって、老人心理の研究をころざしたのは大正12年でしたので、なる程まさに50年になります。当時いわば春秋にとむ23才の若僧が、老人の研究をはじめなんて、まったく気持ちがいきみたとしか考えられませんでした。それが70才になった今日、えらい役に立つとは神ならぬ身の知るよしもない発足でした。研究室の無給助手（大学院に籍をおきましたので）として月50円位の奨学金をもらったことをおぼえています。あと20円位の親からの仕送りで研究と生活とが両立したありがたいご時世だったのです。

その当時老人に関する参考文献や資料は、皆無といってよい時代でしたので、研究課題としてはきわめて生産的のものにちがいありませんでしたが、その方法技術の面ではまったく白紙にちかい状態だったのです。あるときなにかの機会に（忘れましたが）、穂積陳重博士の「隠居論」という大著が刊行されていることを知りまして、それをさがすのに一苦労したことをおもいだします。実は神田の古本屋を片っぴから歩きまわり、足を棒にした苦労がいまだに意識の深層にこびりついているのです。最後の探索に入った本屋で、発見したときの喜びと満足は、死ぬまで忘れることはできないでしょう。こういう過去の苦労話は、そのほかにもたくさんありますが、その苦労の一つ一つが、わたくしの研究を激励してくれたことでした。そして楽な途をえらぼうとする現代学生気質に、はたしてかかる耐性があるでしょうか。

○

なにかの因縁でしょうか。現在恩師のお孫さ

んが老人心理の研究にころざしたという便りをうけました。こんどはわたくしが一生懸命に懇意、激励をしております。懇篤な指導をおしみなくあたえられた先生に対するご恩がえしが、いまこそできるとほんとうにうれしく思ったことでした。けだし、すでに老年学会も設立せられ、研究の機関や調査の機会もようやくえらびうる現状になりつつありますので、同君の将来の大成のために、きめこまかな助言を呈しているのです。

現在老人問題は「高令社会がやってくる」のキャッチフレーズのとおり、社会問題としてはブーム化していることはご承知のことでしょう。そして老年学は旭日昇天のいきおいで発展しています。ことに企業界では定年の問題が、それにともなって社会的には年金のこと、さらに公害と老人のことが非常にやかましくなってきました。学会でも産業老年学（industrial gerontology）という名で、あたらしい分野が開拓されようとしています。若い老年学者はよろしくその方面で活躍してほしいと考えるのは、勿論わたくしひとりの希望と念願ではありませんまい。

○

老人心理研究50年などとは迂闊にもいえないのです。そういう言葉のうらには、いかにも偉業をなしとげたように聞こえますが、実をいえば一昨年（昭和46年）ようやく刊行した「老年学」ただ一冊にすぎないのでして、まったく内心忸怩たらざるをえません。これは当然わたくし自身の懈怠によるものと自責している次第で、学界にも世間にも申訳なくおもっています。「恍惚の人」となるまえに、もっともっと責任をはたさねばなりませんまい。

まあ老いの繰言としておよみください。